

English Garden 第87話

"The next six years were important in establishing my self-image as an American"

Edwin O. Reischauer

「次の6年はアメリカ人としての自覚を確立するのに大切な時だった」 ライシャワー

元駐日アメリカ大使エドウィン・O・ライシャワーの続きです。

1927年、日本のアメリカン・スクールを卒業したエドウィンは、両親のいる日本を離れて兄ロバートの通うオハイオ州のオーバリン大学に入学しました。これは、アメリカ人としてのアイデンティティを確立するために、母国の大学教育を受けさせるという両親の教育方針によるものでした。オーバリン大学で4年、次のハーバード大学院で2年過ごすうちに、エドウィンは「たまたまアメリカ人であった日本の住民ではなく、たまたま日本に生まれたアメリカ人」としての自己を強く意識するようになったと述べています。でも、将来のコースを決めるにあたっては、幼時の環境が決定的な影響力を持っていました。

大学生のときには、日本については両親からの手紙以外にニュースなどを聞くことも読むこともなく、日本食を食べる機会も、日本語を話す機会もほとんどなかったそうです。

それでもエドウィンは、大学で学ぶあいだに東アジアの研究をして国際的な仕事をしたいと思うようになりました。しかし、当時東アジア学という分野は確立されておらず、日本についての講座は一つもありません。そこで、東アジアの研究が比較的進んでいるハーバード大学の燕京(イェンツェン)研究所で中国と日本の勉強をすることにしました。日本を専門に勉強しようというのは、兄のロバートとエドウィンの二人だけでした。

大学院2年のとき、東京帝国大学を卒業したセルゲイ・エリサーエフが客員教授としてハーバードに招かれ、エドウィンは日本学の勉強もできるようになりました。エリサーエフと若い日本の学者・岸本英夫(後に東大教授・宗教学者)の指導で、日本語の講読が始まったのです。そうするうち、願ってもない話が起きました。パリで2年、日本と中国で3年勉強したあと、ハーバードに設立予定の極東言語学科で教えるというものでした。

エドウィンはもちろんこの話を受け、1933年、勇んでパリに向かいました。パリでも日本についての研究はまだあまり進んでいませんでしたが、東アジアをアメリカとヨーロッパという二つの視点から見ることができ、広い視野を得たのです。

パリでは最初の妻となったアドリエンと出会ったこともあり、この上ない日々を過ごしました。少女期を北京で過ごしたアドリエンは中国語が堪能で、エドウィンは大学で学んだフランス語とドイツ語に加えて、中国語をマスターする機会も手に入れました。

1935年(昭和10年)8年ぶりに日本に戻ってみると、大正デモクラシーは色あせ、軍国主義とファシズムの空気が立ちこめていました。両親や両親と接触のある人々が一樣に不安を感じた変化でした。けれども無事に東京での生活を再開し、一足先に東京に来て立教女学院で教えていたアドリエンと結婚して二人で懸命に日本語の勉強に励みました。

エドウィンは東京帝大に通って博士論文に全力を注ぎました。テーマは円仁(天台宗の僧、延暦寺第三代座主。慈覚大師)で、まず「入唐求法巡礼行記(につとうくほうじゅんれいぎょうき)」と題する日記の翻訳にかかりました。これは中国人以外の手による初の中国観察記で、7世紀から9世紀にかけて中国文明を日本に持ち帰った遣唐使についての詳細な記録でもあります。マルコ・ポーロの「東方見聞録」よりも、はるかに正確な内容だそうです。しかし文章は難解で、不明な箇所は天台宗の僧侶の協力を得て読み進みました。中国と日本への興味が同時に満たされるので、エドウィンにとっては実におもしろいテーマでした。日本の学者が円仁に着目したのは、彼の英訳が出てからのことでした。

翌年は京都に移って純日本的で快適な生活を楽しみましたが、思いがけない不幸に見舞われました。すでにプリンストン大学で教えていた兄ロバートが、学生の見学ツアーを率いて上海のホテルに滞在中、中国機の誤爆で足を怪我し、出血多量で命を失ったのです。日中戦争が始まった直後のことでした。ロバートがすでに出版していた「古代日本史」上下二巻と、死後出版された「日本・政府と政治」は、共に有用な参考書として高く評価されました。アメリカは最も優秀な日本研究家を失ったのです。兄の遺骨を前にして、エドウィンは世界がいまや戦争状態にあることをひしひしと感じ、彼にとって大切なアメリカと日本と中国が平和のうちに結ばれるようにと、切に祈ったのです。

1937年に中国に行くときには、戦乱の中国でも通用するパスポートの発行を待つあいだ、韓国に2ヵ月滞在しました。その機会に友人のマッキューンと共に朝鮮語の発音をローマ字に書き移す標準方式を作ることになり、朝鮮語の発音の専門家の協力を得て「マッキューン・ライシャワー方式」を完成させました。これは今でも使われているそうです。

エドウィンとアドリエン夫妻は「頼世和」という名前をつけて中国に1年滞在了ました。日本語の発音に合わせて姓は頼山陽から借用し、名は世界の平和を祈願したものです。

(次回に続く)

参考文献:

"My Life Between Japan and America" Edwin O. Reischauer, Harper & Row, Publishers, New York, 1986

『ライシャワー自伝』エドウィン・O・ライシャワー著、徳岡孝夫訳、文芸春秋、1987年